



Title	明清時代の時間意識 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	金, 博男
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15067号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85469
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Bonan_Jin_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 金 博男

学位論文題名 明清時代の時間意識

・本論文の観点と方法

中国人の時間意識についての研究は、主に哲学、民俗学、歴史学という三つの分野に集中しておこなわれてきたが、文学という観点から、もしくは文学作品を用いた時間意識の研究については、とりわけ明清時代については、空白に近い状態であった。本論文は、中国の明清時代を中心に、中国人の時間意識を考察する文学研究であるとともに、この時代の文学作品を題材とした文化史研究を目指したものである。

本論文の導入においては、古来、中国人には、「猫の目に時間を読み取る」習慣があったことについて詳細に検証する。金氏の論述はここからスタートし、清末民国期に機械時計の普及によって西洋型の時間意識が浸透する以前において、「時間」というものがどのように意識されており、そこから如何にして時間のイメージが構築されていったのかという問題を、いくつかのキーワードを提示しながら解明を試みてゆく。

そもそも西洋型の「新しい」時間の、中国における受容の様相についても、いまだ検討の余地がある。西洋の時計および時間制度が、近代中国人の時間意識を如何に変化させたのか、いまだ明らかでない部分を解明する必要がある。さらに、清末においては、西洋の科学小説や終末論の影響のもと、新たに形成された中国人の時間意識にも注目しなければならない。清末時期、西洋文学の刺激を受けて、中国人の小説創作のみならず、時間そのものにたいする中国人のイメージも大きく変化したと思われるが、清末小説に対する、そのような観点からの研究は、いまだなされていない。近代における中国人の時間意識を研究するうえで、避けては通れない論題のひとつとして、とりわけ「未来」の時間をテーマにしたものの多い清末小説において、「未来」観が如何なるものであったのかについての検証を試みる。

西洋の新しい時間と中国の伝統的時間が混在していた明清時期において、その合流が如何にして発生し、またどのように進行していったのか、以上の問題意識から出発し、明清時代における中国人の時間意識の研究を試みたものが本論文である。

・本論文の内容

本論文は、序章と終章、および八章から構成される。第一章から第八章までは本論に当たる。

序章では、本論の研究背景と問題意識を述べ、論文の構成を説明する。

第一章では、猫の瞳の形態変化によって時刻を定めるという「猫時計」説を取り上げ、明清時代におけるその活用状況を考察する。そもそも猫の瞳で時間を精確に計測することは不可能なのだが、明清時期には、理学者たちによってきわめて観念的に論ぜられ、またこれを活用するための口訣が通書や曆書を通じて流布していた。フランス人宣教師ユックや、ボードレールなどの外国人によって中国イメージのひとつとして言及されるようになるが、清末になると疑問も提示され、これを科学的に検証する論文も現われ、やがて姿を消す。これらの「猫時計」の経緯を、膨大な文献によって検証する。

第二章では、第一章につづき、「猫時計」説が、陰陽や十二支を用いた占術の世界で、「観念的な

時間のあり方」として受容されていた経緯について、さらに詳細に考察し、その背後にある中国人の時間意識を論じる。

第三章では、「息（そく）」すなわち呼吸の数によって時刻を定めるという方法を検証する。人間が一昼夜において一万三千五百回、呼吸をするという説は、現存する中国最古の医書である『靈枢』において脈診に利用されることが記されているが、それが後に、朱子が考える天地運行の理論のひとつへと昇華していったことを指摘する。「息」自体は、本義は鼻息と思われ、前漢時代からすでに「短い時間」と関係づけられ、文学作品においても短い時間の表現として普遍的に用いられていたことを明らかにした。一万三千五百回息説は日本へも伝わり、数多くの『日本書紀』の注釈書に提示されているが、一条兼良は、この説を利用して、逆に時刻を知り得ることを述べている。また、それを文学作品において実践したのが『西遊記』における孫悟空であった。この説は、民国期にいたって、さらなる「進化」を遂げるものの、西洋の科学知識と現代医学の到来によって、否定されていった。

第四章では、西洋型時刻制度や西暦が中国に浸透し、一週七日制が新たな時間概念として清末社会に伝わっていく過程で、日曜休日制の広がり、休息の概念が、徐々に中国人の間に普及していき、それまでの中国人の時間観念および生活スタイルへの自省として積極的に受け入れられるようになったことを論じた。そして、日曜休日制の広がりもまた、都市市民に土曜日の夜から始まる娯楽の時間をもたらした。それゆえにまた日曜日の時間を狙う犯罪事件が多く発生するようになったことを指摘した。日曜日は、休息と娯楽の時間であると同時に、犯罪の時間でもあったのである。

第五章では、「秒」という時間概念を取り上げ、清末において「秒」がイメージさせる、より細かくなった「時間」に関する時間意識の形成について、清末の外交官の筆記や、ジュール・ヴェルヌなど西洋小説の影響のもとに隆盛した清末の科学小説の代表作、徐念慈の『新法螺先生譚』を取り上げ、清末の科学小説に見える「秒」、さらに「時間」にたいする中国文人の新たな模索について考察を試みる。

第六章では、清末時期、西洋小説の影響のもと、「未来」のことを描いた梁啓超『新中国未来記』を取りあげて、その時間の構造に注目しながら、叙事構造を詳細に分析し、時間観念を分析する。『新中国未来記』が、「未来への展望」を描いたというよりも、梁啓超自身の「虚構の回想」に近いものであり、「壬寅」に始まり「壬寅」に終わるこの小説が、梁啓超とともに、干支という円環的時間意識の支配から逃れえなかったと指摘する。

第七章では、中国人における「未来」の時間論へのアプローチとして、正史に記され続けた詩妖という予言を考察する。魏晋南北朝時代以降、詩妖は、外延は拡大するも、史書に記される数はかえって激減し、衰退していく。その背景には、童謡が作られるからくりが明るみになっていったことがあるという。後の明代には、予言への懐疑論が一般的になりつつあるなか、予言を告げる「樟柳神」が流行していたが、それは、子供が予言を吐くという伝統あるいは文化意識のなごりとして、ある種の詩妖が実体化されたものではないかと指摘する。最後に、未来や終末をテーマとした近代の科学小説が、予言の形をもって警世の役割を果たすという点が、古くからの詩妖的「精神」を受け継いだものであることを示す。

終章では、序章において提示した、明清時代における中国人の時間意識研究の問題点を振り返り、本論の各章で論証して得られた新たな研究成果を、あらためて整理して提示する。